

野間宏全集

第十九卷

野間宏全集

第十九卷

筑摩書房

野間宏全集 第十九卷

一九七〇年七月十日第一刷発行

著 者 野間宏

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一一七六五一(代表)
郵便番号一〇一一九一
振替東京四一二三

本文印刷 晁印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社

(分類)0395(製品)71419(出版社)4604

目次

I

サルトル論 小説論と想像力論

小説論——『フランソワ・モリアック氏と自由』をめぐって

5

想像力をめぐって——想像力と知覚のたたかい

19

イメージ、テーマ、結構、構想、構成、構図

33

自由と全体

49

『壁』『部屋』『嘔吐』から『自由への道』へ

63

行為と自由

80

全体の問題

97

慾望の問題

112

労働の問題

129

慾望と労働の問題

慾望と労働と全体の問題

小説の全体

全体の小説

Ⅱ

『サルトル論』批判をめぐって

知覚意識と想像意識

サルトルをめぐって

作者とフィクションとしての読者

Ⅲ

長篇の時代

創造の問題

341 333

326 323 307 239

224 202 172 150

現代の創造行為

〈対談〉全体小説への志向

〈対談者〉玉井五一・羽山英作

解説

渡辺広士

389

357

352

全体小説と想像力

I

サルトル論 小説論と想像力論

小説論

——『フランソワ・モリアック氏と自由』をめぐる——

ここではサルトルの小説論と想像力論について見直すことが、私の目標になります。特にその小説論に光をあてながら、現代文学の中心にあるといえる問題を見るといこうとにしたいと考えます。現代文学の中心にある問題、その一つは文学者の自由の問題であって、そしてその二つはその創造を支える想像力の問題です。この最初の文学者の自由の問題には小説の作中人物の自由の問題というものが重なりあっているといってもよいわけですが、この文学者の自由の問題のところへも、作中人物の自由の問題のところへも想像力の問題が深く関わりあってくるわけで、結局はこの文学者と作中人物の自由の問題を論じながら、さらに想像力、イマジネーションの問題のところへと入っていか

なければならぬことになるわけです。

まず先に結論の方から上って来るようにして言っておきたいのですが、最近のサルトルが以前とは非常に変わっているということ、このことをよく考えて、その上でサルトルの以前の考え、またその文章を見直す必要があるということです。最近サルトルは、日本を訪れて「自分はマルクス主義者である」とはっきりと言っています。これは私がサルトルに会った時にも、自分自身でそう言っていて、しかしそれを認めてくれる人もいるけれどもそれを認めてくれない人も多いという感想を述べていました。実際に彼の『弁証法的理性批判』を読むと、マルクス主義者サルトルの姿がいよいよはっきりと浮かび上って来るように思えます。この書物は翻訳の問題もあると思うのですが、よく熟していない言葉が方々に使われており、まだ十分につきとめていないままに書いたと思われる箇所がかなりあって、読者を困惑のなかにつきおとす条件をそなえているといえるものなのです。しかし、これまでの彼が『存在と無』の中では問題にしきれず、ただ単に現実という風に言っていたような実践の世界を、実践的総体と呼びながらそこへ突き入って行くところからみていくと、サルトルがその考えの上で非常に大きな前進をし、また大きな変貌をとげていることが明らかになるわけです。そしてそこから考えてい

く時、このサルトルが初期にまた中期に書いた文学論、小説論その他いろいろのものがもう一度見直され吟味され、あるいは訂正されなければならないように考えられるわけです。ところが実際はそうではないのに、初期にまた中期にサルトルが書いた小説論とジイドの小説論などによって、アンチ・ロマンの人達は自分の作業をすすめていっているし、また何人かの日本の文学者たちもその現在の創造活動を支えているのではないかも知れられるところがあります。そのような点から考えても、またマルクス主義という立場から考えても、やはりサルトルの最近の理論の展開についてこれと取り組んで、これをとらえ尽し、さらにまたそれに厳しい批判を加える必要があるのではないかと思われるのです。私自身は、『フランソワ・モリアック氏と自由』という、サルトルが一九三九年に書いた小説論をとりあげて、サルトルの初期の小説論のなかにある矛盾を明らかにすることからはじめようと思います。

サルトルはこの中でモリアックの『夜の終り』という小説をその前におきながら、作中人物の自由と作家の自由というものの、この二つを論じているわけですが、しかしその後にはモリアックが、一九三三年に書いた『小説家とその作中人物』という文章と、もう一つ一九二七年に書いた『小説論』という文章を置いているといつてよいでしょう。

う。『小説家とその作中人物』と『小説論』という二つの文章のうちでは、私自身は前者の方に関心を持たされたのだが、後者もまた決して読みすごしてよいというようなものではなく、むしろ、十九世紀の自然主義小説を越えるための小説論とさえいえるものであり、その質も決して低いというべきものではありません。非常にへりくだった観点から、つまり自分はドストエフスキーとかブルーストなど大作家たちに比べたならば、非常に小さい作家にすぎないという風なところに自分の立場を設定してそこから述べていきながら、しかしその論ずるところは、「人間の研究に、人間の外にある論理を導入することを避けたい。恣意的な秩序をこれに課することをおそれる」ということをずっと全体に及ぼして、これをよく読んでみると、いかにサルトルが強引であって、そのほんの一部だけをとりあげてそこをねじまげた上で批判しているのではないかと思えるような感じのものであるわけです。しかし、ではサルトルは果して批判の対象をねじまげて、その上で批判をすすめているのかというと、そうではなくて、やはりその最もつくべきところを、よくとらえてそれをば強力な論理を使うことによってついているわけなのです。その批判の中心点は何かという、モリアックの作品の作中人物はまったく自由を持っていないということです。そしてさらにいえ

ば一般的に小説の作中人物は一人一人がそれ自身として自由であるべきであるということなのです。サルトルはモーリアックの『夜の終り』という小説をとりあげてそれを分析し、批評し、さらに具体的に何カ所か、その場所を指摘して、モーリアックがその作中人物に対してまったく神のよう臨んでいるということを明らかにしています。『夜の終り』というのは、フランスのランド地方の旧家に嫁にいった若い主婦が、その夫を毒殺する、毒殺といっても夫と一緒に家の外へ休みに出ていって楽しんでゐる際、夫のいないときに飲み物の中へ毒薬をたらし込んで殺そうとする事件を取り扱っています。しかしこの女主人公は普通考えられるように夫のほかに恋人があったというわけでは全然ないのです。何の他からの原因というものなしに自分の夫を毒殺するのですが、未遂に終って、裁判を受け夫の証言によって免訴になり、自宅に帰ってくるのです。しかし夫の一家のものたちは、これが毒殺という風に発表されるということだけに注意を向けていて、これが世間に知れわたるのをただただ恐れるわけなのです。それ故に毒殺の証拠なるものを自身あるところまで知っているにもかかわらずそれを隠して否定の証言をする夫と女主人公は再び結ばれようとしたりしました離れなければならなくなったりするような関係に置かれて、その晩年、女主人公テレーズ・

デスケールは最後に精神異常におちこんでいくことになるのです。この小説の作者モーリアック自身の意図としては、夫以外の男との恋愛とか、そのほかの何の原因となるものもないにもかかわらず、地方の旧家の家庭そのものの、家そのものに対して血を吹きかけるものとして、夫のコップに毒薬をたらすということをとりあげようとしたといつてよいわけです。その点から見てもモーリアックが、その当時、つまり一九二七年前後に多く出て来っていた波瀾小説というもののまたそのような非常に波瀾にとんだ筋のある小説、あるいはいろいろな外的事件を織り込んだ小説によって小説の危機を脱しようとする文学的流派に反対していることは明らかなことであつて、小説の危機の打開をそのようになとくに求めずに、人物の自由を保証し小説自体の中に、さらにいいかえれば人物自体の中に原因を置くものとして作品を創り、それによって小説の危機を脱しようというその『小説論』の主張によってそれを書こうとしたとはつきり認めることが出来るのです。しかしその出来上った作品自体は、サルトルがいろいろ具体的に場所をあげて示しているように、ところどころにどうしても女主人公が自分では自分のうそを意図せざるをえなかった。しかし彼女はこうそのに安住し平然としていた。」というような箇所が方

方にあって、むしろそのためにその女主人公の自由が失われ、女主人公が絶対なしえないことが、なされるというような奇妙な作品になってしまっているわけなのです。

この『夜の終り』という作品には、同じ女主人公、テレーズ・デスケールを中心においた『テレーズ・デスケール』(一九二七年)という作品があつて、裁判所で免訴になって帰つて来るこの女主人公の意識の回想からはじまり、それが作品の最初の三分の一ほども続いているわけですが、この女主人公の晩年を描いた『夜の終り』もまた女主人公の眼、意識、その内的独白などを通して描かれ、そしてすすめられる小説であります。それ故にそういう点からみれば、「彼女は自分のうそを意識せざるをえなかった。しかし彼女はこのうそに安住し平然としていた。」などというようにには絶対に書きえないわけなのです。そういう点からいってサルトルの指摘は鋭く、しかも正確であつて、この小説の欠陥を明瞭にとり出しているといえるのです。そして私はその点から見てもモーリアックはその小説中の人物を神の観点から見てゐるというサルトルの批判は誤っていないと思うのです。

サルトルは次のように言っているわけです。「氏は(モーリアック氏)前に、小説家はその創造した人物に対してちょうど神がその被創造物に対すると同じ関係をもっている

と書いている。氏の技巧のおかしな点はすべて氏がその作中人物を神の観点から見ているということから説明される。すなわち神は内部も外部も、魂の奥底も体肉も、全宇宙を同時に眺める。これと同じやり方で、モーリアック氏は氏の小世界に関係あるすべてのものについて何でも知つてゐる。氏が作中人物についていうことは福音書的な言葉であり、氏はこれらの人物を説明し、分類し、有罪の宣告をし、控訴を認めない。もし氏に向かつて『テレーズが用心深い絶望の女だということ、どうして知つてゐるのですか』ときくものがあれば、氏はきつとひどく驚いて、『私がこの女を作つたのではないのですか』と答えるだろう。ところが、そうではないのだ。こうなつたらいいわざるをえないが、小説家は決して神ではない。」(『フランソワ・モーリアック氏と自由』)しかしモーリアックの『小説論』における主張というものは限定をつけなければならないが、むしろサルトルと同じであつて、作中人物は自由でなければならぬといふ主張だといつてもよいのです。モーリアックは作中人物の自由と小説創造者の自由はもとと絶対に対立するものであり、この二つのもの、二つの自由をつきつめることは二律背反そのものののであつて、小説家というものはこの二つのものをどのようにして統一してよいかわからないところにつねに立たされてゐるという問題を出してい

るわけですが。サルトルがある程度簡単にモーリアックはただ神の観点から人物すべてを見、批判し、書いているといっているようなものではないと思います。確かにこの『夜の終り』というそれほど優れていない作品を例にとっているならば、サルトルの鋭く指摘した欠陥が作品の方々に見出されるのだが、モーリアックの小説論というのは必ずしもそのような簡単な、少しつけばすぐにくずれ落ちるような仕掛けのものではないわけです。

モーリアックは次のように言っているのです。この言葉にはいささか宗教の匂いがしみついていてるかのように見えるので、それにわざわざいされて、それでもってただちにモーリアックが、ここでも神の観点から作中人物を見ることだけを主張しているなどという判断におちいったとすれば、それは軽率というものでしょう。モーリアックはその中で「われわれの小説の主人公は自由でなければならぬ。小説家は勝手に彼らの宿命に介入してはならない」とはっきり書いています。「いささか瀆聖のおそれがなくはないが、あえていうならば、小説家がその人物との関係において当面する困難は、キリスト教のあらゆる教派の神学者たちが、神と人間との関係において解決しようと試みた困難に大いに似ている。いずれの場合にも、問題は被造物（作中人物）の自由と造物主（小説家）の自由とを融和す

ることである。われわれの小説の主人公は自由でなければならぬ（マルブランシュが神の意志は個人の意志をとおして世界に介入することはないといっているのと同様に）。しかし他方、神も同様に自由でなければならぬ。その被造物にたいして無限に自由に働きかけなければならない。そして小説家は、その作品にたいして、芸術家の絶対の自由を享受しなければならない。」（『小説論』）

そこで今度はサルトルがモーリアックに対してしたようにサルトルの小説論ではなくてその小説を例にして見ていった場合に、果してモーリアックのいう神の自由、そしてサルトルのいう神の観点というようなものをサルトルが使っていないのかということになるが、私はこのようにして眼を光らせて見て行けば、サルトル自身がいまは困惑におちいるにちがいないと考えます。例えば『自由への道』の中では、パリにいる人物とベルリンにいる人物とを同時並行して書いて行くというやり方がとられているところがあります。そしてその各人物は確かにそれぞれ自由であるわけですが、私はこの遠くはなれてある人物を同時並行して書いて行くというこの視点は一体何なのか、サルトルのいう神の観点ではないのかという問題がサルトルが『夜の終り』を批判したやり方からすれば当然そこに出てくるものと思うのです。サルトルはかなりあとになって『フランソ

ワ・モーリアック氏と自由』というこのモーリアックの小説にたいする批判の文章が過度であつたことをはっきり認めた、ということが明らかにされていますが、それは当然のことではないかと私は考えるのです。とはいへ、このサルトルの文章の影響は非常に大きいものがあつたのであつて、アンチ・ロマンの人たちのうちにはこのサルトルの作中人物論の上によつて進んで来ている人がかなりいると考へられるのです。そしてサルトル自身もまたそれを自分の作品のなかで実行しようとして、ある登場人物マチウならマチウが出てきた場合には、その一人の人物の自由といふか眼といふか、そういうものによつてその場面を描いていくというやり方です。しかし遠くはなれた場所にいる人物を同時並行して書くというところにおいて、サルトルはもちろんこの彼自身のそれまで考へているところを裏切ることになりかねないわけであつて、サルトルはこの時、彼が神の観点とよぶものを改めて問題とせざるを得ないところに立たされたといえるのではないかと思へます。

『自由への道』の第二部『猶予』は第二次大戦前のミュンヘン会談を中心にしたヨーロッパの危機を、ここに登場し描かれるさまざまな人物の眼、意識、内的独白などを通して、とらえているわけで、ここにもサルトルの作中人物の

意識、内部を通してすべてのものを描くというサルトルの主張が生かされていると一応いってよいと思います。ミュンヘン会談という大きな危機は、各人物の意識を通して描かれるが故に、断片化され、それが他のものの意識を通して現われた部分と部分とが、つながったり、また切断されたりしているものであつて、サルトルは、このようにしてしか、事件といふものは人間には現われはしない、そこに事件の超越性があると考え、その考えを、その新しい技法によつて結実させようとしているのです。そしてこの点について、私は何の文句もさしはさむところはないのです。ここにはドス・パススより借りてきた技法が余りにも露骨に透けて見えすぎるといふことを除けば、たしかに『フランソワ・モーリアック氏と自由』の主張と同じほどの独自の力をもつた作業があるといえるでしょう。とはいへ、これをその『フランソワ・モーリアック氏と自由』の横に置いて、果してそのままにすごすことが出来るでしょうか。たしかにサルトルは各人物の内部を保証し、その自由を決しておかすことなどはしていないといつてもよいのです。とはいへ、各人間の意識内部に同時に自由に出入りするなどということは、一人の人間にはまったく不可能なことなのです。そしてサルトルはここでは、その人間の不可能なことをする、しかもいろいろなさまざまな人物の意識内部に同時には

いるという、「神」のみが出来るともいうべきことを、見事にやってのけているといつてよいのではないでしょうか。とはいえ、私はこの同時把握とよばれる技法、技巧の問題をふくんでいるこのことについて、それほどサルトルをせめないでおこうと思います。

私はいまはこの問題については、しばらくおいて、サルトルの『フランソワ・モリアック氏と自由』にあつては、小説そのものが、読者の地点から見られ、分析されすぎていて、作者の地点から見られていない、また分析されていないということに、注意を向けたいと思うのです。もっとも文学作品の創造・成立を読者と作者の関係のなかにおいてとらえようという主張を持っているサルトルの特色がすでに、このようなところにもよくあらわれているといえはいえないこともないのです。そしてその読者の地点からして、小説とは何かを明らかにしたその分析はやはりすぐれているのです。

しかしその読者の地点だけから小説を考えて行くだけでは、作中人物の自由と創造者としての小説家の自由との間にある問題を十分見るなどということは出来ないのです。そしてサルトルはこの読者の地点から小説を考えて行くことばかりをすすめてしまったので、作中人物が内から発する自由、さらに解りやすいえば一度人物の中に生命が宿

ったならば、もはやその人物の自由の後に作家はついて行くほかにはないということ、サルトルは人物の内部から、その意識を通じて人物を描きとらえるということと、少し混同してしまうこととなつたのではないかと私は考えるのです。

例えばサルトルは小説というものは、内側から書くか外側から書くか、この二つしかないという風にも考えるのですが、そのこともまたこのところに深く関連しているといえるでしょう。「小説中の人物はかれらりの掟をもっている。そのもっとも厳しいものは、小説家は人物の目撃者となるか共犯者となることは出来ようが、決して同時に両者にはなりえないということである。内部か外部か。この掟に注意しなかったためにモリアック氏は作中人物の意識を殺しているのである。」こうサルトルはいっているのですが、たしかに『夜の終り』という余りはかばかしくない作品を見ればモリアックが作中人物の意識を殺していることは、まったくサルトルのいう通りなのです。とはいえ、小説家は人物の目撃者となるか共犯者となることはできようが、決して同時に両者にはなりえないなどと断定することは、間違っていると私には考えられるのです。この場合の目撃者というのが自然主義者、自然主義作家たちをさしていることは明らかであつて、たしかに自然主義作